第 65 回神奈川建築コンクール　住宅部門審査総評

審査委員　内田　青蔵

昨年 3 年ぶりに復活したこの神奈川建築コンクールは、今年もコロナ禍の影響で実施したものの、第二次審査では現地審査が出来なかった。

建物の審査は、図面や写真だけでは十分には行えない。やはり、現地に行き、その空間がどのようなものかを実体験することで、設計者や施工者の意図が理解できるものといえる。また、建物の利用者・生活者との会話から、その空間の魅力も伝わってくる。そして、建物の立地状況を見ることで、周辺環境との関係をどう捉えているのかも知ることができるのである。来年こそは、コロナ禍という災いを乗り越え、現地調査をもとに作品の魅力を理解し評価したいと願っている。

さて、今年度の住宅部門の応募作品は 35 件。昨年より 4 件少なかったが、多くの力作の応募があった。応募作品は、審査委員による第一次審査及び第二次審査を行い、入賞作品を決定した。第一次審査は書類による審査である。委員の投票結果をもとに第一次審査を行い、今年度は 11 作品を第二次審査の対象作品と決定した。第二次審査は、既に記したようにコロナ禍のため、現地視察の代わりにオンラインで現地から設計担当者らによる応募作品の解説を行っていただき、その後、質疑応答を行った。なお、オンラインの場合、建物の印象はその操作や説明に慣れた方とそうでない方の差は大きく、情報の質の差が審査に関係するという指摘も審査時にあったが、今回は技巧の差は問題視せず、あくまでもオンラインで得た内容をもとに第二次審査を行うこととした。

第二次審査も委員による投票結果をもとに、委員のそれぞれの評価点に関する意見交換を行い、各作品の魅力を再確認しつつ、最終的な評価を合議により決定した。その結果、今年度の表彰作品は、最優秀賞 1 件、優秀賞 7 件、アピール賞 1 件の合計 9 件となった。

以下、入賞作品について簡単に紹介したい。

最優秀賞には**「西竹之丸の家」**が選出された。横浜市内の傾斜地に住戸が密集している高台の道路沿いを敷地とした住宅である。細長い建物の二つの妻面に大きな開口部を設け、一方は海側に、もう一方は道路側に開くという大胆な構成で、夜間は特に開口部からの明かりも放ち、地域に溶け込んでいる様子が窺える。劣悪な密集した立地条件の場合、多くは周囲と断絶して閉じてしまう傾向がある中で、地域に開くことを意識したデザインが高く評価された。若手建築家としての今後の活躍の期待も込められ選ばれた。

次に優秀賞の紹介である。**「緑道の家」「鎌倉の丘庭」「海と空へ」「もえぎ野の家」「真鶴の改築住宅とアトリエ」「Pente」「茅ヶ崎の住まい」**の 7 作品が選ばれた。特に**「緑道の家」**は、最優秀候補として俎上に上がった。緑道沿いの敷地の多くの住宅が緑道に尻を向けているのに対し、緑道側に積極的に開くことを意識した点が高く評価されたからである。ただ、その開き方がもっと大胆でもよかったとの指摘もあった。今後の発展を期待したい。

「海と空へ」と**「鎌倉の丘庭」**は同じ建築家の手になるもので、共に現代住宅に見られる

LDK という典型的な間取りとは異なる住まい方をめざした意欲的な作品として高く評価された。ただ、その提示された生活が家族や生活の変容に対応し得えるのかといった疑問点も指摘された。より一層の提案の進化を期待したい。

他の「**もえぎ野の家**」は個性的な幾何学的造形性、「**真鶴の改築住宅とアトリエ**」はホールと縁側の生み出す開放的空間性、「**Pente**」は大胆な斜面による内部空間、そして、「**茅ヶ崎の住まい**」は周辺の自然となじむシンプルな造形性、といった特徴がそれぞれ評価された。

また、「**柳小路ハイツ**」はアピール賞（環境）として、周辺環境を住まいに取り組もうとする問題意識とその積極的な提案が評価された。